

連載 私の町はどんな町⑨

—熊谷直実(蓮生)—

今回は、熊谷次郎直実の武骨で頑固一徹な気性と、情け深い心情が偲ばれるエピソードを紹介します。

直実の出家した原因は、通説では壇ノ浦で泣く泣く幼い平敦盛を殺めたこととなつていますが、「吾妻鏡」によりますと、出家の直接の原因は建久三年(一一九二年)伯父の久下直光と熊谷郷の境界について裁判となり、頼朝の前での裁きの席上、久下直光が梶原景時と組んで、口下手な直実の反論を退け、所領の一部を取られてしまいました。卑劣なやり方に怒つた直実は

「憤怒に堪えず、自ら刀をとりて髻(もとどり)を除らい遂電す」と又

「右大将家を恨み申事ありて俄かに出家して法名を『蓮生』とぞ申しける」

と記されています。

◎「逆馬」の話

出家して熊谷蓮生となつた直実は「往生礼讃」にある、「行往坐臥、西方に背を向けず」という文を深く信じていました。かりそめにも西に背を向けることはしませんでした。それで京都から関東へ下る時も、師の法然上人が居られる京都に背を向けないように、馬の鞍を逆さまに置かせ馬の頭の方に背を向けて乗り、馬に馬の口をひかせて下向したといひます。

能美湧泉筆による「逆馬図」に蓮生が、逆さに馬に乗っている絵が残っています。



逆馬図(能美湧泉筆)

浄土にも 剛のものとかいいてうしろみせねば

とその絵に蓮生の歌が書かれています。

◎誕生寺へ法然の自像を納めるの事

法然上人の誕生の地は、岡山県久米郡久米南町にあります「誕生寺」です。

私の故郷、久米郡美咲町の隣町にある誕生寺には数回訪ねたことがあります。山門を入るとすぐ前に大きな銀杏の木があります。法然が十三才の時に植えられたものと伝えられているので、樹齢八百年にもなります。

今の本堂は一六九五年に再建されたものです。当時建立の時、法然が父母追孝の料のため、自ら彫つた自像を、熊谷蓮生が上人に代わって師の等身大の座像を、背中合わせに背負つて、京都からはるばるこの地まで歩いて納めたといひます。

法然上人像を背にして、喜び勇んで美作国へ向かう蓮生の姿は「逆馬図」と共に一幅の絵になるでしょう。誕生寺の本尊は今も、この木彫りの

法然像であると云います。

蓮生は一一九八年に、法然が叡山を下り、初めて居住した思い出の地の「粟生野」に茅家を作り、一字の仏殿を造立し『念仏三昧院』と名づけて、数年念仏三昧の日々を送つていたらしいです。

この寺が今の『粟生野光明寺』(京都府長岡京市)であり、西山浄土宗総本山です。

その後六十五才の時(一一二〇五年)法然教団弾圧という京の情勢変化で、念仏三昧院の後事を弟子の幸阿に託して京を後に関東へ下向し、熊谷の蓮生が幼少の頃過した「熊谷館」で余生を送りました。この時も逆馬であつたと思ひます。



熊谷直実像(熊谷駅前)

熊谷宿には、他に特筆すべき遺構はありません。

慶応年間に造られた、宿の本陣竹井澹如翁の別邸であつた『星溪園』があります。玉の池という池を中心名石を配し、周囲に木竹を植えた回遊式庭園です。昭和二十五年に熊谷市が譲り受けて管理していますが、手入れは充分とはいへません。

本町一丁目の埼玉信金の前に、日本橋から十六里に当たる『道路元標』があります。高さ五十七センチ位の花崗岩に「熊谷市道元標」と刻まれています。歩いていたらつまずきそうな道標です。

その先の百貨店の角を右折したところに「旧中山道」と彫られた二米余りの大きな石碑が建っています。

中山道は、ゆるやかな左カーブを描きながら進んで、再び国道十七号線に重なり次の「深谷宿」へと続いていきます。

(小島 次郎)